

〔書 評〕

『消されたマッコリ。』（「ほろ酔いブックス」第6作）

〔伊地知紀子著、東京、社会評論社、2015年、183頁、1800円＋税〕

高 村 竜 平

（秋田大学）

本書は、済州島および日本の済州島出身者についての社会的・人類学的研究を行ってきた著者による著作である。タイトルにある通り、朝鮮語の「マッコリ」つまり日本語で言うドブろく生産活動を中心に、大阪府南部の泉南地方という特定地方の在日朝鮮人の生活史を描くものとなっている。

第1部「多奈川一級酒」では、第1章「瓦の村から軍需工場の町へ」・第2章「敗戦／解放と「多奈川一級」酒」・第3章「「暁の急襲」と多奈川事件」の3章をもうけて大阪府泉南郡岬町の多奈川を記述の対象としている。多奈川は1940年代より川崎重工業の造船工場と海軍工廠が立地し、その造成のための土木工事をきっかけに居住するようになった朝鮮人と、それに加えて工場稼働後に徴用工として強制動員された朝鮮人が居住するようになった。終戦後、後者はほとんどが帰郷したが、前者は生活基盤がすでに日本にあったためここでくず鉄拾いなどさまざまな手段で生計を立てていたが、そのひとつとして密造酒づくりがあったのである。

1952年3月のある早朝、国税局・地方検察庁・警察の合同による大々的な密造酒取り締まりがこの地域に入ったが、朝鮮人の抵抗により押収物は奪還され逮捕者もいなかった。この騒動は「多奈川事件」とよばれ、新聞報

道もされたうえ府議会でも問題視されたため、名誉挽回をはかる警察は住民12名に対し公務執行妨害と酒税法違反容疑で逮捕状をとり、同月末に押収と搜索を開始した。この際、日本人住民を含む22名を留置し、また一人の朝鮮人が銃撃にあい死亡した。この事件では19名が起訴され、地裁では無罪や執行猶予となったが、高裁では検察側の主張が大幅に認められ、5名が罰金についての執行猶予を取り消し、1名が実刑とされた（最高裁で上告棄却）。このうち、起訴された人々の大部分は北朝鮮への帰国船に乗ったという。

第2部「酒がつなぐ暮らし・人・生き様」では、第4章「生きんがために」・第5章「受け継がれていくもの」の2章で、やはり泉南地方に属する岸和田市・貝塚市や大阪市内も含めて、酒造にかかわった朝鮮人の生活史が述べられる。第1部で触れた軍需工場や、この地域の地場産業である紡績工場、あるいは泉佐野市の陸軍飛行場建設などを契機にこの地域に住むようになった朝鮮人労働者とその家族を対象に、岸和田市や貝塚市では公営住宅が建設されたが、その契機は1934年の室戸台風のために住居をうしなった朝鮮人が多数いたためであったという。戦後もそれらの住宅は朝鮮人の集住地域として維持され、やはり密造酒製造の場になっていた。「多奈

川事件」以降も取り締まりはあったが、生計を立てる手段としての酒類密造と販売は続いた。1950年代末には貝塚市で、酒造は生活難に対応するためのものであるとして、手入れに対して生活の保障を要求する申し入れを朝鮮総連の支部が市長に対して行ったことも紹介されている。このほか、大阪市内の事例や、山口県・宮城県のような非集住地域での酒造のエピソードも紹介され、酒造にかぎらず養豚など他の生業や民族教育も含め、とくに1960年代ごろまでの在日朝鮮人の生活を詳述するものとなっている。それは、一般的な「日本の歴史」では高度経済成長期として描かれ、また現在では牧歌的な時代として懐古の対象でもある時代の、別の姿を示すものでもある。そして最後に補章「路地の横道」として、兵庫県を舞台とした著者自身とその家族の生活史が、本書で記述された泉南地域の戦中・戦後史と接続される。

以上のような内容が、平易な文体で記述されていることのみならず、ソフトカバーで写真を多く使い、「ほろよいブックス」という酒にかかわるシリーズ本の一冊として、2000円を切る価格で販売されているように、本書は研究書・学術書というよりは一般書として書かれている。したがって本書を紹介するにあたっては、調査手法や理論的な背景にかかわって評価するよりも、むしろ現在の日本の状況において本書がどのような意義を持つのか、を考えることが重要であろう。そのためにもまずは補助線として紹介しておきたい作品がある。「この世界の片隅で」である。

ここで取り上げる「この世界の片隅で」は、こうの史代が2007年から2009年にかけて『漫画アクション』に連載したマンガおよびそれをもとにした単行本と、それを原作として2016年に公開された片淵須直監督による劇場アニメである¹⁾。この作品は戦中から敗戦直後にかけての広島と呉を舞台として、ひとりの女性の日常生活を描くことに重点を置いている。もちろんフィクションではあるが、

時代が大きく動く状況を背景としつつ、特定の地域や人物・家族に着目して日常生活を描くという点では、『消されたマッコリ。』と共通している。

ここで注目したいのは、8月15日に敗戦を知った主人公のすずが放つ言葉である。玉音放送を聞いたあと高台の畑に向かったすずが、町に太極旗がひるがえっていることに気づき、地面に突っ伏す様子が描かれていることは、原作マンガでも劇場アニメでも変わりはない。そのときすずは、原作では「ああ／暴力で従えとったいう事か。じゃけえ暴力に屈するいう事かね／それがこの国の正体かね／うちも知らんまま死にたかったなあ」とつぶやく。一方アニメでは、「海の向こうから来たお米や大豆、そんなもんでできとるんじゃなあ、ウチは。じゃけえ暴力にも屈せんとならんのかね。ああ、何も考えんボーっとしたウチのままでいたかったなあ」という発話になっている。この改変について監督の片淵は、町山智浩との対談の中で次のように述べている。

それまですずさん自身が、朝鮮の方に暴力を振るっている場面も、誰かが暴力を振るうところを目撃する場面もないんですよ。なので、ここで暴力どうこうという言葉を出しても、あまり説得力がない気がしまして。それよりも、すずさんは毎日の食卓を預かる主婦なので、自分たちの食べ物（米）がどこから来ていたのか考えることで、自分たちの行ったことが身に染みるというふうにしたかったんですね。²⁾

片須の言うように原作マンガでは、たしかに朝鮮人とかかわりや、ましてや暴力をふるうシーンなどはあらわれない。だがしかし、朝鮮・台湾から移入された食料もまた描かれてはいない。劇場アニメでは闇市で台湾米を売っている場面があるが、これは原作にはない。つまりアニメでは、この場面を追加する

ことによって、主人公が植民地から移入されていた米や大豆を想起したと描けているわけで、だとすれば、朝鮮人とかかわる場面を追加することで、敗戦の日の主人公の独白を原作マンガそのままにすることもできたはずであろう。当時の広島に多くの朝鮮人がすんでいたことは原爆投下による被爆者の存在が示しているし、軍港であった呉も同様である³⁾。もちろん若い女性である主人公が、みずから直接暴力をふるう状況は考えにくかったであろうが、なぜ広島に、呉に朝鮮人がいるのか、どのような生活をしているのかを考えることは十分に可能なはずである。

ここで、ただひとつのシーンをもって作品全体を批評するつもりはないし、原作マンガの同じ場面よりも劇場アニメ版を肯定的に評価することも十分に可能であろう⁴⁾。ただ、どのように評価するにせよ、この改変によって確実に薄れたものがある。それは、名前と身体を持った朝鮮人ひとりひとりが、「内地」の日本人の生活圏にもいたことへの意識である。原作マンガの独白では、たとえ直接的な描写はなかったとしても、「暴力で従えとった」対象の存在を主人公が認識していたことが前提となっているが、アニメ版では、人間ではなく食料を中心とした「もの」を介した植民地との関係しか言及されないのだ。作品そのものやこの描写への評価とは別に、朝鮮人の痕跡が薄まる現象が、とくに『漫画アクション』という成人男性向けの雑誌連載から単行本化を経て、映画館で年齢制限なく公開されたアニメ映画となる過程でおこったことは、軽視すべきではないだろう。たとえば、ドラマから始まる韓流ブームによって「韓国」への関心は確実に高まったが、だからといって在日朝鮮人についての理解が深まったとも言えない状況に、現在の日本はあるのだから⁵⁾。

本書『消されたマッコリ。』が対峙しようとしているのは、このように人間としての朝鮮人をはじめとしたマイノリティの存在が、

日本人の生活にかかわる記憶から「消され」ようとしている状況である。本書では、コリアタウンとしてよく知られるようになった集住地域でなく、そもそも都市部でもない泉南地方が舞台となっている。そのような地域でも在日朝鮮人のコミュニティがあり、独自の生活文化を展開していたことが叙述されているわけである。

本書の最後に明かされる、著者の個人史への接続にならって、筆者の個人史からも本書について語ってみよう。じつは筆者は、本書で中心的にとりあげられる岬町と貝塚市の間にある泉南市で、4歳から19歳までの成長期をすごした。もともとこの地域に住んでいたわけではなく、新興住宅地に入居した立場ではあったが、それでも本書に登場するほとんどの地名と一部の事業所は、筆者にもなじみ深いものであった。しかし「多奈川」といえば火力発電所のある場所として記憶はしていても、軍需工場や密造酒、あるいは朝鮮人にかかわる記憶は、私にはない⁶⁾。まして、先祖代々この地域に暮らしてきたわけでもなく、また社会人としてこの地域に暮らしたわけでもなかったからか、筆者にとっては、恥ずかしながら本書の内容は初めて知ることばかりであった。本書に描かれたような状況は、同時代を生きたひとであれば当然のように知っていたとしても、記録し伝えなければ消えていく記憶なのだ。そしてその場合、本書のような体裁で発表することは有効な方法であろう。

また本書では、朝鮮人の独自の生活世界を描くにとどまらず、日本人住民とのつながりについて多くのスペースを割いて紹介している。密造酒をつくるのは朝鮮人であっても、それを売り歩くのは日本人であり、消費者もまた日本人であったことは、多奈川事件を取り上げた第1部でも、それ以外の地域を取り上げた第2部でも繰り返し紹介される。原料の米を日本人が提供していたという事例も紹介される。またその酒も、マッコリをいった

ん火入れして焼酎にしたものを濾過したアルコールをもとにして、日本酒風にした「清酒」であり、朝鮮人がもともと飲んでいてマッコリや焼酎ではなかった。独自の生活世界があったと言っても、日本人の世界と隔離されていたのではなく、当然のことながら深い相互作用のもとに成り立っていたということであるし、それはこの地域の日本人の生活が、朝鮮人による生産活動にも依拠していたということでもある。そしてそのような事実関係だけでなく、本書のもととなったフィールドワークそのものが、多数の日本人住民の協力を得て成り立っている。基本的な資料としてなんども引用される岬町教育委員会による町史をはじめとして、先行研究や文献資料もまた、地域で蓄積されてきたものがおおい。その意味で、戦後日本における地方史が、「日本人の歴史」ととどまらない成果を蓄積したこと、そしてその作業を可能にした地域住民のつながりの延長上に、本書は存在している。

地域社会における朝鮮人と日本人との関係が共生関係だけではないことは、もちろんであろう。本書でも、「最後まで造って、手痛い火傷をしたのは、造った朝鮮人だけ」という語りが紹介されるように、たしかに状況は日本人と「同じ」ではない。また本書には、朝鮮人が労働者でなく経営者である企業も登場する。その点も含めて、生活史を中心にした接触状況の研究が、地方史あるいは地域史を基盤に生み出される可能性を、本書は示していると評価したい。

注

- 1) そのほか 2011 年には単発ドラマとして放映され、執筆現在 (2018 年 8 月) は地上波での連続ドラマとして放映されているが、執筆時には連続ドラマのストーリーは、ここで問

題にしている敗戦の日の描写まで至っていない。本稿でのセリフの引用は、原作マンガについては双葉社刊行の単行本、劇場アニメについては youtube 配信版 (<https://www.youtube.com/watch?v=tcaSVaJS1WU>) を参照した。

- 2) こうの史代他『ありがとう、うちを見つけてくれて「この世界の片隅に」公式ファンブック』(2017 年、双葉社) 147 ページ。
- 3) たとえば、在韓被爆者についての市場淳子『ヒロシマを持ち帰った人々「韓国の広島」はなぜ生まれたのか』(増補改訂版、凱風社、2005 年) には、呉に居住して海軍に徴用された人物が紹介されている (同書 310-311 ページ)。朝鮮人被爆者についてはほかに、韓国政府による報告書 (対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会編『広島・長崎朝鮮人の原爆被害に関する真相調査』2015) も日本語に翻訳されている。
- 4) たとえば、上に引用した監督の説明を援用すれば、原作マンガの独白では、朝鮮人を「暴力で従えていた」のはあくまでも「この国」であり、主人公自身は間接的な関与であるのに対し、劇場アニメの台詞では主人公自身の日常生活が暴力につながっていることを認識したものとも言える。そもそも、ここで紹介した場面に続く 8 月 15 日の夜の描写も原作マンガにはないので、もし作品批評の一部としてこの場面について考えようとするのであれば、より詳細な検討が必要であろう。
- 5) たとえば、小川玲子「日本における韓流の受容と在日コリアン」大野俊編『メディア文化と相互イメージ形成』(九州大学出版会、2010、119-146 ページ) で紹介されている。
- 6) 府立青少年海洋センターも多奈川だと記憶していたが、本稿のために調べたところ岬町淡輪にあった。